

## はじめに

「先生は本をたくさん読みなさいって言います。でも本を自分で持つことができない僕は、誰かにお願いして本を支えてもらい、1ページずつめくってもらわなければ読めません。1冊の本を読むのに、僕は何回もお願いしなければなりません。本は好きだけど、それが面倒で、読むことが嫌になりました」。

ある肢体不自由特別支援学校で伺った話です。他にも視覚や知的、読み書き障害など、さまざまな障害が原因となり、自分で紙の本を読むことが難しい子どもたちが大勢います。

そんな子どもたちへの読書支援を目指し、伊藤忠記念財団が電子図書（マルチメディアDAISY規格）の製作、提供をはじめてから5年が経過しました。この間、「わいわい文庫」と名づけ当財団が製作した電子図書は、212作品になりました。

2011年、最初に電子図書を配布した後に実施したアンケート調査では、マルチメディアDAISY規格を知らなかった人が約70%、アンケートの回収率もわずか35.5%でした。それに対し、2014年のアンケート回収率は96.5%。アンケート結果は本誌90ページに掲載しましたが、多くの人から「わいわい文庫を活用している」と回答がありました。本誌にご執筆いただきました先生方をはじめ、皆様のおかげで少しずつですが、マルチメディアDAISY図書の知名度が上がり、必要としている子どもたちの手元に届いていることを実感しています。

さて、今年度は大きな実験を二つ行いました。

まずは絵本の電子化方法についてです。これまで、文章が多い絵本は、お話が進むと絵が画面外にスクロールされてしまい、文字だけの画面になっていました。そのため、「絵が見えなくなった途端に、子どもたちの集中力が切れてしまう」という声が多く寄せられました。そこで絵本は、ページ内の文章をいくつかに分け、常に絵が同時に表記されるように工夫しました。

二つ目の実験は、日本の昔話を地元の言葉で語りかける作品の製作です。故郷のお話や言葉は、その土地に育つ子どもたちにとって遺伝子の一つであり、大切にしてもらいたいものです。同時に他の土地に伝わるいろいろなお話や言葉に触れ、興味・関心を広げることも、自分の故郷を大切に思う気持ちを育むことにつながると考えています。その第一弾として鳥取県立図書館にご協力をいただき、「因幡の白うさぎ」をVer.BLUEに収録しました。今後各地の図書館に協力を求め、増やしていくことを目指していきます。

読書は、幅広い知識と豊かな言葉を身につける有効な手段です。また、豊かな言葉は、人との関わりを円滑にし、より良い人生を歩む礎となります。そのためには、子どもたち一人ひとりに合った読み方を提供することも、必要ではないでしょうか。

これからも私たちは微力ではありますが、電子図書の普及を通し、障害のある子どもたちへ「読む機会」を提供してまいります。

2015年3月

公益財団法人伊藤忠記念財団